

パネルディスカッション

高校までの資質・能力の育成を大学でどう評価するか

パネリスト▶ 白井 俊（独立行政法人大学入試センター試験・研究統括補佐官）
 西郡 大（佐賀大学アドミッションセンター長・教授）
 森口 安紀（京都市立塔南高等学校教頭）
 大西 俊弘（大学コンソーシアム京高大連携推進室コーディネーター／龍谷大学理工学部教授）
 コーディネーター▶ 鮫島 輝美（大学コンソーシアム京高大連携推進室コーディネーター／京都光華女子大学健康科学部看護学科講師）

鮫島 皆さま、こんにちは。午前中は非常に刺激的なお話をいただいて、皆さま、ますますいろいろなことを考えたいと思っているところだと思います。そこでパネルディスカッションとしましては、できれば皆さまからご質問をいただき、フロアと対話ができたらよかったです。ご存じのように、非常にホットな話題のため、議論も多面的であり、限られた時間の中で皆さまと有意義な時間を過ごすことは、なかなか難しいと考え、今回は、非常にローカルな現場での高校側の1つの声として、森口先生にどのような取り組みをなさっているのかお話しいただき、大学側として大西先生にローカルな立場からお話しいただきたいと思います。なお、当ディスカッションは、『教育の接続』としての入試改革を踏まえ、「高校までの資質・能力の育成を大学でどう評価するのか」を目的としています。

また、今から皆さまに自覚していただきたいことがあります。私は、看護学の教員で、グループ・ダイナミックスのミクロ・マクロリンクを専門にしています。今回、私がコーディネーターをさせていただく意味は、国で考えられている議論を、ローカルな現場の私たちが実践から受け取り、成長・自己実現していけるように一人一人の人格を育成し、暫定的に成長を確認・評価しながら育てていく者として、共に考

えていくことにあります。客観的な評価など実はできないが、成長を喜び、その成長を確認し、共に育てていく協働的な実践者として、このような場を提供することこそ、私たちができる役割ではないかと考えております。このような立場で、皆さまとご一緒に、高等教育でどのように育成し、大学でどのように評価していくのかを議論できればと思っております。

それでは、早速ですが、森口先生よろしくお願いたします。

森口 皆さん、こんにちは、ただいまご紹介いただきました、京都市立塔南高等学校の森口と申します。本日は、どうぞよろしくお願いたします。

（スライド1）高等学校を代表いたしまして、私からは、大学と高校の教育の接続という観点で「高校におけるキャリア形成」と題し、本校において主体性の育成に関する取り組みの中で大切にしていることをお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

（スライド2）本日の説明内容ですが、まずは本校の紹介をさせていただき、本校での「総合的な探究の時間」に関する説明をさせていただいた後、最後にキャリア形成に関するまとめをお話ししたいと思います。

(スライド3～6) それでは、まず本校の紹介をさせていただきます。塔南高校は東寺の五重の塔の南にあることが校名の由来で、昭和38年創立の学校です。専門学科として「教育みらい科」、そして「普通科」は特別進学コースと普通進学コースを設置し、それぞれの目標に応じて授業で学力の向上を目指しています。教育目標としましては、「高い学力と豊かな人間性を育む」「将来、社会で活躍・貢献する人材を育成する」ことを目指し、特に生徒たちの将来の姿を考え、それを実現するために成長してほしいことから、生徒たちへのメッセージとして『「なりたい自分」を探し、深める』という言葉で表しています。高校での様々な経験が『「なりたい自分」を探し、深める』ための、「なりたい自分になるための自分探しと自分づくり」につながるように、社会に貢献できる人材を育成するための取り組みを行っています。

(スライド7) 本校は、西大路駅近くの唐橋地区へ移転し、元洛陽工業高校の跡地に、令和5年4月に新しい普通科系高校として再編される予定になっています。

(スライド8) これが新しい校舎のイメージ図です。本校では、この新しい普通科系高校への接続が円滑にできるように、現在、塔南高校の取り組みを進め、新校で想定している教育を少しでも先取りして、生徒たちに提供したいと考えています。

(スライド9) その教育改革の柱が3つあります。1つ目は、「コミュニティスクール」の導入です。学校運営協議会を設置し、学校だけでなく社会で学ぶことができる環境を支援していただいております。2つ目は、「キャリア教育」の充実です。「総合的な探究の時間」を中心に、「なりたい自分」を探し、その実現を目指しています。3つ目は、「主体性の育成」です。コミュニティスクールの学校運営協議会に生徒たちが参画したり、学校内外のさまざま

な取り組みにボランティアとして参加し、また国際交流や科学のイベントなどにも積極的に参加したりする体制を整えて、取り組んでいます。

(スライド10) まず、先ほど、1つ目に説明させていただきました「コミュニティスクール」は京都府内の高校で初めて設置されました。地域企業、行政機関や大学から理事の皆様をお迎えして、「学校での学び」と「社会での学び」をつなぐ豊かな学びの環境を支援していただいております。この運営協議会には生徒たちも参画し、自分たちがやりたいことを提案することにも取り組んでいます。

(スライド11) そして、「キャリア教育」に関する活動ですが、「総合的な探究の時間」のグループワークや、課題研究の充実を図っています。また、教育みらい科の「学校現場実習」では、近隣の小学校にご協力いただき、生徒たちが授業を体験します。そして、本校では「キャリアについて考える」と題して、企業訪問や大学訪問も行っています。

(スライド12) 「主体性の育成」については、さまざまなボランティア活動を積極的に参加するよう呼びかけています。夏休みのオープンスクールでは、中学生を迎え、生徒が企画して学校の様子を説明しています。また、近くの吉祥院図書館で科学あそびを行ったり、京都市が主催するグローバルリーダー育成研修に参加したりしています。また、防災ボランティアを募集し、南消防団と連携して防災ハイスクールを行いました。本校では、さまざまなボランティア活動に力を入れています。このような取り組みを通して、「なりたい自分」を探し、深めることを目的に本校の教育を進めております。

(スライド13～14) それでは、早速ですが、本校の教育改革の1つでもある「総合的な探究の時間」で取り組んでいる内容を説明したいと思います。本校の普通科のキャリア教育のコンセプトは、まず1年次に進路の関心を高め、2

年次では進路を探究し、そして3年次で進路を決定する、という流れで進めています。

(スライド15) 普通科の「総合的な探究の時間」においては、自己の将来像について漠然としていて、まだあまり考えられていない、高校に入ってから進路を決めようと思って入学してくる生徒たちが、自分の将来について前向きに考えていくための教材や指導法を、NPO 法人与連携して共同開発しています。その教材を使い、自分の興味・関心に基づいた課題を設定し、個人研究を行い、漠然としていた将来像を言語化することによって、高校の卒業後の進路につなげていく取り組みを行っています。



(スライド16~19) 1年生のときは共同開発した教材を使い、まず自己の特性を知り、自分はどのようなことに向いているかという適性を考えた上で、それを社会でどのように活かしていくかを学びます。そして、自分の進路や将来に向けて前向きに考えていくマインドをつくることを1年次で取り組んでいます。また、漠然としていた興味・関心から目指す将来像を考え、どのように生きていきたいかを1年次に考えていきます。

そして、これ(スライド17)がグループワークの様子です。本校では「アクティブ・ラーニング教室」をつくっていただき、いすや机を自由にレイアウトして、学習活動が展開できるようになっています。これ(スライド18)は1年次のマーケティングの授業です。他者と協働し

ていろいろなことを取り組むことによって、課題を解決していく中で、将来のことを前向きに考えるマインドを形成し、自分の興味・関心を自分自身の将来像につなげていってほしいと考えています。それぞれの教材の内容については説明できませんでしたが、幾つかの項目に分かれた教材を作っております。評価としては、一つ一つの教材に取り組む過程で協働する力や課題を探究する力、プレゼンで発表する、表現する力を見ます。

(スライド20~21) また、2~3年次につきましても、進路を探究し決定することを目的とし、1年次に模索していた自分の興味・関心に応じて課題を設定し、2年次に個人で探究を行います。個人研究に取り組む期間も短いのですが、調べることのみで終わってしまうこともありますが、それが社会でどのように課題として認識されているかを知るために、12月の「キャリアフィールドワーク」で、いろいろな企業や大学を訪問します。自分が今まで調べてきたことや興味・関心を持っていることが社会に貢献できる内容なのか、今、社会ではどのようなことが課題になっているのかを自分で考えて将来につなげていきます。個人研究で調べただけではなく、それが社会でどのように関連付けられているのかというところまで2年次で活動します。そして、漠然としていた将来像を言語化して進路決定につなげていくのが、本校の3年次の「総合的な探究の時間」で行っている内容です。企業や大学、地域とも連携し、キャリアフィールドワークを行っているのですが、大学に行く場合は学問と社会のつながりを知る、企業を訪れる場合には企業理念や働く上での思いを知る、そのようなところから課題を認識して、自分はどのように生きていきたいかを考え、自分の将来を考えていきます。

(スライド22) それでは、2年次の「課題研究発表」の様子について、具体的にお話しさせていただきます。この事例の生徒は言語に興味

を持ち、「翻訳できない言葉」について探究しました。この絵本にある単語を例にとると、マレー語の「ピサンザプラ」は「バナナを食べる所要時間」という意味だそうです。日本では、バナナであろうが、ミカンであろうが、リンゴであろうが、全部、食べる所要時間を表す単語は同じですが、マレーシアでは「バナナを食べる所要時間」を表す言語があります。おいしいバナナが育てられているところでは、バナナだけにその所要時間を表す単語が用いられるということを知り、その国の文化を知らないこと、その言語の意味を理解することができないこと、翻訳できない言葉を理解するには、異文化を受け入れることであるという発表をしていました。この生徒はこの個人研究後に国際交流会館にキャリアフィールドワークに行くことになります。そのことについては、最後のまとめで、その生徒がどのように考えてきたかについてお伝えしたいと思います。

(スライド 23～24) 2年次の「総合的な探究の時間」の評価は、先ほど、ご説明させていただいた、個人探究が主な内容になります。また、キャリアフィールドワークで学んだ内容も評価に入れています。そして、3年次は、自分の将来像をきちんと言語化して、自分はどのような進路に進んでいこうとしているかを言葉で表すことができているかを評価に入れています。

(スライド 25～26) 最後に、本校の「総合的な探究の時間」について少しまとめさせていただきます。1年次においては進路への関心を高めます。自分の進路に対して前向きに考え、取り組んでいくマインドの育成を目的にしています。2年次以降、しっかりと将来について考えていくことに力を入れ、自分の興味・関心について漠然としたものから具体化し、そして、3年次にはそれを言語化していくという流れで進めています。

(スライド 27～30) 先ほどの生徒の例で言

いますと、高校入学時点では、「自分の将来について、まだ、あまり考えていない」という状況でした。しかし、自分の特性を知り、グループワークを通じて、いろいろなことを前向きに取り組んでいくことを学び、自分の興味・関心は「言語」であることを見つけ、英語を活かした職業に就きたいというところまで1年次で考えていました。そして、2年次に「翻訳できない言葉」について探究し、学びたいことを具体化していく過程で、国際交流会館にキャリアフィールドワークに行きました。本来、この生徒は「海外で自分が社会で貢献できることを考えていきたい」と言っていたのですが、日本に来る外国人留学生に対する支援がまだまだ足りていないことをキャリアフィールドワークの中で学びます。そして、自分の興味・関心に基づいて、日本で自分ができることを調べ、さまざまなことを学んだ上で、「外国人留学生に対して自分ができることは何か」を考えていきます。本校で留学する生徒はあまりいないのですが、自己の将来像と結び付けて、春休みに留学し、自分の進みたい進路を考えていきました。

この生徒は、吹奏楽部に入っております。吹奏楽部では全国大会を目指して活動しながら、留学して、進路について考え、3年次の進路決定をしていきました。進路選択時には、「心理学も勉強し、母国語と文化の違いから困っている留学生のために、自分ができることは何かを考えていきたい。今は留学生のために日本でどんなことができるかを大学で学びたい」というようにキャリア意識を向上させていきました。1年生のときには何も考えることができていなかったところから、3年生になるまでに、このような形で成長していってくれました。

実際には、1年次から3年次までの連続した取り組みの中で、高校卒業後も成長し続けようとする生徒の資質や能力を、高校時代にしっかりと育てていきたいと思っております。高校側としては、先ほど説明した課題研究発表などの

主体的な取り組みに関する個々の成果物だけではなく、一連の取り組みの中で獲得した態度や価値観によってキャリア意識が向上し、今後も前向きに取り組もうとする力についても、大学等でいかに評価していただくか、私たちもどうしたら評価していただけるかを考えながら、今後も生徒の育成に携わっていきたいと思っております。

以上で、高校からの説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

鮫島 森口先生、ありがとうございました。

それでは、続きまして龍谷大学の大西先生のご発表をお願いいたします。

大西 失礼します。龍谷大学の大西と申します。

(スライド2)簡単に自己紹介をさせていただきます。以前は高校の教員をしており、その後、国立の中高一貫校に勤め、今は龍谷大学の理工学部勤務しています。他の大学でも非常勤をしていて、学力の高い層、低い層といろいろ教えております。

(スライド3)今日の午前中の話にもありました「PISAショック」のこと、文部科学省の教育政策がPISAショックを受けて変わったこと、高大接続システム改革会議の最終報告からいろいろな提言がなされていることについて、今回、お話をしようかと思います。それらが、今、私が勤めている龍谷大学の入試の現状を鑑みて本当に実施できるのか、特に私立の大規模大学の入試を変えられるのかという観点でお話をしたいと思います。そして、最後に、新課程で学んだ高校生が大学入試を受けるのが2025年だと思いますので、それに向けた話をしたいと思います。

(スライド4~5)近代の学校というのは、日本の場合、以前から藩校がありましたが、工場働く労働者が大量に必要になり、そのような人たちを養成するニーズから誕生してきた

かだと思います。知識の量が多いほうがいい、計算は速くて正確なほうがいい、そのような人が優秀な人とされてきました。現在でも、まだ日本ではそれらがいいとされていると思います。しかし、世界的には、これからの時代を生きていく子どもたちにどんな力が必要かということが話題になっていて、日本の教育政策も最近はこの流れで構築されているかと思っています。大昔ですと、父親も祖父もみんな同じ仕事をしていたことがあったかと思いますが、今の時代はそんなことはあり得ません。大学生が10年後、20年後、どんな仕事に就いているか分からない、今まで出会ったことのない課題に立ち向かっているかもしれない今の時代には、未知への課題に対処する能力が求められているかと思っています。近年は、人工知能のAIも出現して、それがより加速しているかと思っています。



(スライド6~7)数日前の新聞で、PISA2018の結果が発表になりました。試験は昨年行われて、結果が発表になったのですが、日本は15位で、今後、大きな騒ぎになるのではないかと考えています。2003年に日本が14位になり、世間にショックを与えました。「PISAショック」と言われているのは、2004年12月に発表されたPISA2003の結果です。このときに読解力が14位となり、2桁台に落ちたので、文部科学省は非常に危機感を抱き、文部科学省の政策がここから大きく変わったように思います。文部科学省はこの後「言語活動の充実」を言い始めて、

現行の学習指導要領はこの方針が貫かれているかと思います。

(スライド8) PISAの「読解力」といいますと、国語の力を付けたいと思っいる方が多いかと思っいます。しかし、そうではなく、問題を見ますと、実用的な文章や図表、地図がたくさん出てくる文章を読みこなせる力、そして課題文に書かれたことを根拠として意見を言える力が求められているのです。原文は「Reading Literacy」です。これをほかと同じように「リテラシー」と言っいたら扱っいがだっいぶ違っったかと思っうのですが、これのみ「読解力」と訳したのはまっずかっったのではないかと個人的には思っっています。

(スライド9) 文部科学省が、その後どうしたかというところ、小・中学校で全国学力・学習状況調査を始めました。単に統計データを取りたいだけであれば、その学年の数%を調べれば統計的には十分だと思っいますが、これを悉皆調査でやっったところに文部科学省の意図を感じます。これを何年か続っけていきますと、特にB問題がPISAの読解力の問題を意識した問題になっているのですが、全国の小学生と中学生全員に受けさせたということは、現場に非常に大きな影響を与えたと思っいます。指導要領に書くよりも、指導主事の先生が言うよりも、何よりも効果があっったのだらうと思っいます。

(スライド10~12) ここで言ったいことは、「試験で現場の意識を変えよう」という意図を非常に感じるということです。その数年後には抽出調査になりましたが、現場から希望を出して受けさせてくださいという事態になり、現場には影響が大きっったのだらうと思っいます。どんな問題かというところ、A問題は普通の問題ですが、B問題はぱっつと見たら、漫画みたいなものが出てきて、従来の感覚では国語の問題らしくありません。これは数学の問題ですが、数学に写真はまっず出てきません。とても意図を持って、このような出題を始めました。「試験で現場の

意識を変えよう」とする政策は、PISA型の読解力を重視して、小・中学校には、ある程度、浸透したと思っいます。

(スライド13~15) 「次は、高等学校だ」という認識があっったのではないかと思っいます。これは、共通テストです。昨年度の試行テストの問題です。著作権の図や著作権法の条文が出てくるなど、従来の国語のテストでは考えられなかつたような問題を読み取る力を付けたいという形になってきています。これは基調講演①でも紹介されましたが、階段の問題です。数学のテストで実用的に階段の写真が出てくることは今までになかつたことです。私は、以前、センターテストを作る仕事をしておりましたが、普通の無味乾燥な文章よりもこのような文章を作るほうはるかに大変だと思っいます。

(スライド16) 今、話題の「共通テスト」ですが、読解力重視だけにしておいたら良かつたと思っうのです。高校の授業を変えたいなど、いろいろな思っいがあっって、現在、少し難しい状態になっています。

(スライド24~32) 時間がなくなっってきましたので、話を省いていきます。今、私は龍谷大学に勤めておりました。学生数2万人の大きな大学ですが、アドミッション・ポリシーを決めておまして、これに従っって入試を行っっていますが、現実にはこんな方式があっって、もう訳が分かりません。ざっっくり言っますと、こんな形です。いずれにせよ、入試問題だけで8セット作らなければいけません。このような状態の中で、国が言っていることが本当にできるかというところ、なかなか難しいと思っておりました。それ以外にも指定校推薦等も行っっており、こんなに入試方式があることを、私も、今日、初めて知りました。ざっっくり言っますと、この辺はいわゆる専願で、学生確保には大事どころです。こちらは併願で、たくさん受けっただいて、受験料確保には大事です。最近、文部科学省が厳しくなっってきました、定員を超えると補助

金削減がありますので、合否判定は神業となり、アドミッション・ポリシーどころではないというのが正直なところ。入試を変えられるかということ、本当に難しいと思っています。龍谷大学は数学だけ記述式なのですが、入試部からは「他大学と合わせてマークにしませんか」とよく言われます。他大学と合わせたほうが受験生を取りやすいという意識があるのだろうと思います。他大学に合わせて方式を変えるのが非常に難しいです。

(スライド33~36) もうそろそろ終わりますが、新学習指導要領のことを少し話しておきたいと思います。既に発表になっており、今後どうなっていくかですが、実際に実施されるのは令和4年からです。その前の令和3年に教科書採択をします、その前の令和2年度末には教育課程を決めておく必要があります。けれども、このときには大学入試科目は何も見えていません。そこで、どのようなことになるかというと、「取りあえず、一番難しい科目をやらせておこう」となります。その結果、どの高校もあまり変わらないカリキュラムとなり、「探究」もあったものではないということになりかねないのです。それは、今後、一番心配される場所です。

(スライド37~38) また、「指導要録」も改訂されますが、「評定」は残るようです。ということは、評定平均重視の考えも、なかなか変わらないと思います。今後に向けて、どのように制度設計していくかが課題ではないかと思っています。少し駆け足になりましたが、以上です。

鮫島 大西先生、ありがとうございました。

それでは、皆さまお待たせいたしました。ただいまよりディスカッションを始めさせていただきます。皆さまに提出いただいたコメントシートのうち、白井さんや西郡先生宛のものはお渡ししてあります。全体について

のコメントを見せていただいた結果、大きくは「育成」と「評価」について、パネルディスカッションの議論のテーマにできていると思います。この「育成」と「評価」ですが、「育成」は学生・生徒だけの問題ではなく、私たち教員側もどのように研修するのか、力を付けるためにどのような学びをしていかなければいけないのかと同時に、学生・生徒をどのように評価するのかということです。また、私たちの教育をどのように振り返り、どこを評価し、どこを改善していくのか、そのような視点があるかと思いました。高校と大学からの事例を踏まえ、白井さんと西郡先生から追加や補足も含め、ご意見をいただければと思います。では、白井さんからよろしくお願いいたします。



白井 たくさんコメントをいただいて、ありがとうございました。個別にはなかなか時間はありませんが、大きなところとして、「評価」と「大学入試」との関連性です。高校での評価と大学入試の主体性評価があって、そこがなかなか捉えにくいところかと思っています。そもそも高校までの指導、評価については、学習指導要領に則って行うことが基本になってきますが、学校によって教育課程が違っても、基本的には同じような仕組みに則っています。ところが、それが大学入試における評価となると、当然、それぞれの大学によって「うちの大学は、こういう主体性を求めるんです」というところが出てくると思います。なので、それが必ずしも同

じものではないのは当然だと思います。大学が「主体性」を評価する中で、高校からの調査書を参考にすることもあって、高校の調査書だけで書き切れない部分、e-Portfolioをどこまで使えるかという議論はあるでしょうが、多様な活動を評価していくことがあると思っています。なので、当たり前ですが、指導要領、高校までの主体的に学習に取り組む態度の評価と大学の主体性等評価には差異が出てくることになると思います。

高校までの指導における評価の仕方なのですが、基本的には観点を連動させて考えないといけないと思います。先ほどのお話で申し上げたのですが、3つの観点があります。観点ごとに評価するのが基本です。小学校や中学校では観点ごとに評価をしていたと思うのですが、それが形骸化している部分があって、先ほどの話の中にも出てきました高校の事案ですが、知識・技能や思考力から全く切り離してしまって、宿題をよく出しているなど、そこだけの評価してしまうのはおかしいです。観点ごとに評価するのは大事ですが、全体を統一的に見る視点が必要です。今の高校の評価だと、どちらかというと定期考査に重きが置かれていると思います。何%かは授業態度や提出物を見ている先生もいらっしゃると思います。もちろん、それを全否定する必要はありませんが、定期考査中心の評価から、普段の学習のプロセスを見ていく。そこにアクティブ・ラーニングを入れることは、生徒の多様な活動の状況を見る機会をつくることでもあり、授業のデザイン自体を考えることによって多様な評価の場面が出てきます。もちろん、定期考査を重視することはありますが、定期考査だけではなく、普段のレポートやパフォーマンスなど、いろいろな観点で見えていくことだと思っています。

「これでは、大変ではないか」という声があります。普段の授業の中で子どもたちの様子を見ていく上で、小学校・中学校の先生は座席表

を見ながら結構細かく書き込んだり、毎時間ごとにいろいろなことを「振り返りシート」みたいな形にして、とても熱心に行っている先生がたくさんいらっしゃいます。個人的には、そこまで必要ないと思っているので、先生方のポイントになるところを単元や全体の中で決めていただいて、評価していただくのが良いと思っています。

「評価」については、いろいろな考えがありますが、国によって、「教育課程をしっかりと決めていて、評価は、ある程度、先生方に委ねます」という国もあれば、逆に「教育課程、カリキュラム等はあまり決めないで、とにかく結果だけ出してください。結果を評価します」という国もあります。教育課程と評価のバランスは国によって違いますが、日本は、教育課程は割合しっかりと決めていますが、評価については、基本的に先生の裁量が非常に大きいところがあります。観点が与えられていますが、その観点の中で、どう評価していくのかは、先生がご判断いただく部分だと思います。もし、今の定期考査中心の評価があるとしたら、アクティブ・ラーニングを推進する観点からも、いろいろな評価の場面を入れてくれば、自動的にいろいろな授業改善、デザインを考え直すことにもつながっていくと思います。以上です。

鮫島 ありがとうございます。西郡先生、お願いします。

西郡 私は、主体性の評価で少し話しましたので、そこについて少しコメントさせていただきます。主体性等評価と言いますが、これはA0入試や推薦入試、一部の受験者層を対象とした入試でこれまでも行ってきたことですし、高大接続改革があって、主体性評価するようになったからといって何も混乱することではなく、新しいことではなかったはずで、今回、この主体性評価が非常に大きな注目を集めている理由

は、全ての入試区分においてそれを評価しなければいけない、特に一般選抜においてどう評価するのかということが非常に重要だからだと思います。一般入試ですので、主体性を評価するキーワードが一人歩きしているのですが、まず、一般入試で見るべきところが何か、あるいはAOや推薦の特別入試で見るべきところが何なのかということ整理して議論すべき必要があるかと思っています。

今日、私は一般入試を中心に話しましたが、一般入試というのは、先ほどの大西先生の話でもありましたが、私立大学においてはかなり複雑になっていて、それで主体性を見るのは現実的には難しいです。そうすると、基本的な基礎学力を中心とした評価になると思います。会場から「基礎学力の評価と主体性を間接的に見られないのか」というコメントもありましたが、もちろん、間接的には見られると思います。ただ、今回の趣旨は試験の影響力や入試があることによって少しでも主体的な活動、探究的な学びを喚起したいという狙いがあるとすると、そこは何かしらの手だてを考えなければいけないことが考えられます。

一般入試で主体性や高校時代の活動実績を非常に重視して評価すると、私は2年浪人して大学に行ったのですが、高校時代の評価がずっと引き継がれるのは困ります。そうすると、まずいというところがあります。そのような点において、一般入試で評価すべき主体性という部分は何かといいますと、私は主体性の直接的な評価よりも、大学が求める人材像とのマッチングをいかに図ることができるかという観点で、主体性を考えた方がいいのではないかと思います。より正確な主体性、精度を高めた主体性に関わるものを評価するとすれば、AO入試や推薦入試で時間をかけていろいろな手法があると思います。そのようなもので見れば学びの変容などを丁寧に見ることができます。主体性の評価という点からは、このようなところを考

えるべきではないかと思います。

鮫島 ありがとうございます。白井さんから、日本では教育課程をしっかりと見ているが、現場の先生方の裁量で評価ができるとお話しいただきました。森口先生、実際に現場で、今、評価を細かく行っておられると思いますが、ご苦労している点や難しいと思っている点について、お話しいただければと思います。

森口 失礼します。「総合的な探究の時間」の評価は特に難しい部分があると思います。それぞれの取り組みで、必ず、この時間ではどのようなことを学んだか、そしてどのような力が付いたかということをもとめる振り返りシートを毎回提出させています。その提出物の一つ一つをためて1年次の取り組みを評価しています。2年次は個人探究の評価になります。個人探究は、自分の興味・関心がない内容であると主体的に取り組もうということにはなかなかありませんので、それを活かした形での課題研究のテーマにしています。テーマによっては、調べを進めて、とてもいい結果が出る場合と、自分の興味・関心のあるテーマを一生懸命取り組んでも、なかなか成果につながらない場合がありますので、非常に頑張っている過程を評価するのか、それとも個人探究のプレゼンの内容を評価するのか、何をどのように評価していったらいいのかが、難しい部分です。

ただ、本校の場合は、必ず生徒の個人テーマは興味・関心に基づく内容にしているので、教員として「ここをこういうふうに調べていったら、きっとこっちのほうに行くのではないか」という場合であっても、それを教員があまり指導しすぎてしまうと、生徒が取り組んでいるのか教員が取り組んでいるのか分からなくなってきましたので、なんとか生徒たちの興味・関心をテーマに進めていくようにしています。しかし、調べを進めていく過程で、失敗することが

わかる場合もあり、そのときは、成果物のみの評価にするのは大変難しいです。本校では、その失敗の課程も含めて生徒の成長につながっていくことを踏まえた上で指導しています。

入試で高校時代に取り組んだ内容を評価していただくときに、取り組んだ内容が成果として出る場合と出ない場合がありますので、大変難しいところでもあります。本校の場合は、個人研究を進める際に、自分の将来について考え、どのようなことをしたいかというところまでつなげていくことを大切にしております。大学入試では個人研究の内容はもちろんですが、その個人研究をきっかけとして自分が大学やその先で、将来、社会で貢献するために何をしたいかという過程を含めた生徒の成長を見ていただけると、大変ありがたいと思っております。

鮫島 ありがとうございます。西郡先生から佐賀大学での入試の主体性評価について詳しくお話しいただきましたので、龍谷大学のような非常に大きな大学での入試の難しさや、入試ではできないが入学してからのマンモス大学なりの取り組みや事例について、大西先生からご紹介いただけたらと思います。

大西 大学としての課題は、特に指定校推薦やスポーツ推薦で学力の担保が確実にできていないことです。もちろん、指定校推薦では、評定平均何点以上という形では確保できているのかもしれませんが、指定校で合格してしまうと、11月から勉強をしなくなりますので、その学生たちが入学後にモチベーションを維持するのが一番の課題です。それなりに行っていることはあります。例えば、高校での勉強が不十分な子のための授業を行ったり、そのような子たちを指導してもらう元高校の先生を雇用したり、いろいろ行っはしておりますが、これといった特効薬のようなものがないのが現状です。

鮫島 ありがとうございます。今までのご発言に追加する形でお話しいただきましたが、「これをお聞きしたい」「このあたりは、どうですか」などの質問をいただければと思います。では、白井さんからお願いしてよろしいですか。



白井 私が大学の先生にお伺いしたいと思っていることについてです。試験に手間暇をかければ子どもたちの姿がよく見えると思います。もちろん、大きな大学で、たくさんの受験生がいると、一人一人を細かく見るというのは、なかなかできないことは理解しながらも、大きな大学では、当然、スタッフ、教職員の先生方もたくさんいるので、見ることでできる体制もあるのではないかという気がします。佐賀大学も、かなり丁寧に見られていらっしゃると思います。せっかく、少子化の時代で、一人一人見ることができ、コストをかけるチャンスでもあるし、どれだけ丁寧に見ていますというのは大学にとっても売りのポイントですよ。自分が受験生のときにはA0入試はなかったのですが、試験問題を見て「この大学は、いい問題を出しているから、ここだったら行ってもいいかな」という判断をしていました。そのようなことはお考えになられているのかどうか、少しお伺いできればと思いました。

大西 龍谷大学は2万人と割と学生数が多い大学ですが、それなりに細かく見ている入試もあります。例えば、付属校・関係校があり、系

列校から推薦を受けて行う入試があるのですが、そのような入試では個別面接も行っています。面接だけではなく、夏前からスクーリングのような形で、大学に来てどんな学びをするか体験するといったことも行っています。ただ、それはありつつも、私は国立大学でも教えていますが、スタッフの数は国立と私立では全く違い、学生数に占める教員の割合や事務職員の数も違いますので、現状の入試回数を維持したまま国立と同じような手厚い選考は、なかなかできないと思います。

先ほど、一般入試を8回行っていると言いましたが、それを1回、2回に減らせばかなり可能性はあると思いますが、システムを変えていかなないと難しいと思います。国立大学の場合はなんだかんだいっても第一志望で受けに来る生徒が多いのですが、私の大学ですと、上に同志社大学や立命館大学があり、本来はそこへ行きたいのだけれども、お試して龍谷大学を受けの層がいます。その逆のパターンもあって、龍谷大学は難しいが、記念受験に来るとい層もいます。いろいろな層が受けに来ますので、私の大学だけ特色入試のような形に持っていくのが現状です。

西郡 少子化の影響もあって、丁寧に見られるのではないかという問題提起がありました。大学の教員も一緒に減っているの、数の上ではなかなか変わらないと思います。国立大学といえ、一般入試だと非常に多くの人数になってしまいます。もし仮に全員を見ようとすると、学部教員を総動員で総力戦になると思います。最初に実施し始めたときはうまくいくのかもしれませんが、おそらく受験対策等でその評価は形骸化してくると思います。形骸化してくると、評価する学部の先生たちは疲労感がたまってきます。疲労感がたまってくると、入試制度を変更しようというサイクルに陥って、新たな評価を行います。そこで高校側がまた混乱

するといった負のサイクルに陥ることを懸念します。丁寧に評価するのは、一般入試以外で、各学部の考え方の中で、いろいろな形で評価していくことが現実的なのところかと思います。

鮫島 ありがとうございます。私は、京都光華女子大学の所属ですが、偏差値50前後の学生を受け入れていますので、私どものような大学とは選抜の難しさが違うのかと思います。手間をかければかけるほど正しい評価ができるのか、結局どんなに丁寧にしても完全に評価できないのではないのかと思うので、大学側は、高校で育ててくれた力と大学が欲しい学生像を、もう一度、きちんと見直していく必要があるのかと思います。

また、私が、一度、聞いてみたいと思ったことは、大学側は調査書をどこまで見ているのかということです。高校の先生は、これに非常に手間暇をかけて書いてくださっています。裏話をしますと、悪いことが書けないと聞いています。私は高校時代、非常に休みがちでしたので「体調を壊しやすい性質である」といったことを書いていただいたように、調査書を書くことに非常に苦労されています。大学は調査書をどこまで見ているのか。そこは形骸化してくるところをなんとか活かせるように、大学が高校の先生たちが書いておられる調査書を受けて、活きた評価といいますか、生徒のためになるように少しでも見てもらえると、先生方が残業しながら調査書を書く意味が出てくるのかと思います。

お時間がだんだんなくなってきていますが、もう一度、今のディスカッションを受けて、感じていることがあればお願いします。もしくは、ほかの方に聞いてみたいことやお答えできるようなことがあればお願いします。

西郡 聞いてみたいことは、先ほど、丁寧に評価する話がありましたが、大学が選抜する立場

において、一番重要なことは評価方法ではなく、どんな志願者集団を形成するかということです。受けた人たちが全員、大学の欲しい集団だったら別にくじでもいいですし、じゃんけんでもいいのです。そうすると、大学にとっては全員が欲しい志願者ですので、取ることができます。そうすると、受けるほうは不満があるので、何かしらの公平な方法が必要になります。一方で、志願者全員が大学が求めている人たちが構成されていたら、どんなに評価方法を検討しても何も意味がありません。大学にとっては、志願者集団の形成、あるいは志願者をどう育てていくのかという点が重要だと思います。

例えば、佐賀大学の取り組みについてコメントにもあったのですが、「大学での学びへの具体的なイメージを持ってもらうためにどんなことをやっているか」です。スライドでも少し触れましたが、各学部が県内の高校生に対して年3回、高校3年間、全部で8回、継続的に大学が提供するプログラムに参加してもらいます。教師を目指したい人、医者を目指したい人、理工系技術者を目指したい人という形で、5本のプログラムがあり、継続的に参加して、振り返りのポートフォリオを作り、一定の条件をクリアすると修了書を出します。大学としてできる教育サービスの提供です。そのような機会の提供を通じて高校側がうまく探究型に活かしてもらい、大学を目指す人が育っていければと思います。その中で、先ほど、森口先生が、キャリアの中での取り組みをお話しされていましたが、各大学に求める高校への支援など、どのようなことが大学から提供されると、より学びが深まるのかをお聞かせいただければと思います。

森口 さまざまな高大連携の仕方があると思いますが、大学でどのようなことを学んでいるかという内容をお伺いすることはかなりあります。現在、どのような課題があって、どのよ

うなことが社会に求められているかということ、高校生が聞く機会があれば、それを基に生徒たちが、自分がやりたいことを考えていく上で、それが社会でどのように役立っていくかを考えていくきっかけになると思います。高校生が理解できるところに研究内容を落とし込まないと難しいと思いますが、大学側がどのような課題意識を持って、どのような研究をしようとしているかを知ること、将来のことを考えるきっかけづくりになると思います。

大学で高校生の課題研究に対して何かアドバイスをしていただくことだけではなく、「今、こういうことが課題だから高校生のときにその課題を考えていくことが必要だ」「社会では、このようなことが求められている」というような考えるきっかけを教えていただくと、高校生自身も「社会でどのようなことが必要なのか」「高校生の興味・関心とつながる研究内容は何か」など、これから将来について考えていくときに前向きに取り組めると思います。内容が漠然としており、すぐお答えするのはなかなか難しいのですが、そのような連携ができるとありがたいと思います。

鮫島 ありがとうございます。西郡先生に、私からも聞きたいことがあります。大学の教員側の理解や入試に対する普及として、佐賀大学ではどのような取り組みをされていますか。

西郡 これは佐賀大学の事情なのかもしれませんが、このような制度を新しく導入するのは、学部によっていろいろな意見が出てきて、おそらく制度ができません。ですので、それに関しては、私はアドミッションセンターにいますが、「こういった形で、こういったことで、このくらいの影響力があって、このくらいのリスクがあります。こういった制度を導入してはどうですか」と、高校にもかなり回って、高校の先生方の意見も踏まえて提案して、ある種、

強引なこともあります。納得までされているか分かりませんが、この制度を導入して実現していきましょと説明しています。評価する先生方にとって、とても負担になる、教育研究に支障をきたすような制度は本末転倒です。なので、先ほど、評価支援システムの話もしましたが、あのようなシステムを導入することで、教員に負担をかけないよう工夫しているところです。

鮫島 ありがとうございます。そろそろまとめとして、「育成」と「評価」というパネルディスカッションを収束していきたいと思えます。

基調講演では、白井さんから国の方針を非常に丁寧に説明いただいて、それを受けて西郡先生から佐賀大学というローカルな大学での取り組みについて一定の振り返りを聞くことができました。入試がどう変わっていくのか、どうしたらいいのかという不安もありながらも、森口先生から生徒の主体的な取り組みとして事例をご紹介いただき、違う視点で、大西先生から大学側の評価の難しさをご提示いただきました。それぞれのお立場から、今後、教育改革がうまくいくためにはどのようなことを考えていったらいいのかも含めて、最後に一言ずついただければと思います。

白井 今回の高大接続改革は、入試が変わるから高校も変わるという意見もあり、それはそれで事実としてあると思えます。一方で、それは邪道ではないか、本来、それぞれが変わるべきだというご意見もあり、それぞれ一理あると思えます。私は、そこは連動して変わっていくものと思えます。入試が変わるから高校が変わる部分もあるし、高校が変わるから入試が変わる部分もあるかと思えます。探究的な学習でも、まさに、そのとおりであります。今、総合探究がなかなか普及しない、活発化・活性化しない

のは、入試がそこを評価してくれないからです。

一方で、今、ご発表があったように、各高校ですごく熱心に探究的な活動をしてきたら、大学側としてもそれを何かの形で評価しないとイケないとなれば、入試もおのずから変わっていかざるを得ないと思っています。どうしても高校から見ると、大学は「入れてもらう」という感じだったと思うのですが、それこそ少子化の時代、高校生が少し視点を変えて、「僕は、こういう探究活動をやってきました。あなたの大学は、僕を受け入れられるような力がありますか」というように、もう少し高校と大学が、お互いを評価し合うような、対話的な関係になっていくといいかと思っています。

それから、アドミッションの話もありました。確かに、今の大学の先生方は国立も私立も非常に厳しい状況にあるのは事実だと思っています。ただ、一方で、大学自体もいろいろ見直すべきところがあると思えます。今日、大学の先生もいらっしゃると思うのですが、アドミッションオフィスで、教職共同で、従来のように大学の先生だけではなく事務職員の方ともっとうまく連携して、入試の専門家みたいな人を育成していくことが大切です。先生が試験問題の作成、採点、場合によっては面接に時間を取られすぎてしまうと、日本全体として研究に負担がかかってしまうところもあるので、日本の大学全体として、適切なバランスを考えていくところがあるかと思えます。以上です。

西郡 まとめということで、11月の民間試験の延期や先日の記述式の問題の見送りなどは、これはこれでいい機会ではないかと思えます。高大接続答申が出たときは、多くの方が理念は理解できたが、実際にどうしていくかというところにもものすごく疑問を感じていました。この改革が本質的に何のためにやるべきものか、ポートフォリオというキーワードが出てきたがポートフォリオは何のために使うのが有

効なのか。今日のPISAショックの話にもありましたが、2018年調査の読解力は非常に落ちています。過去には、それを基に言語の充実に動いた話がありましたが、そもそも何のために言語の充実といった議論に至ったのかを見直す意味でも、今日のお話はわれわれに考えるきっかけを提供してくれたのではないかと思います。

さらに、白井さんから基調講演で説明していただいた中に、「キー・コンピテンシー」の話がありました。キーワードとしては、われわれもよく耳にしますが、実際、国際的にどのような形で議論されているのか、そのようなこととの比較を通して、今、高大接続改革で実現したことは何か、それを行うために現実には何を行っていけばいいのかを考えるきっかけになったのではないかと思います。今一度、改革の本質的な部分に立ち返り、建設的な議論をしていければと思います。

森口 今日の午前中の講演の中で、西郡先生から主体性を営む必要がある生徒の層についてのお話がありました。指示待ちや自ら考えようとしなないなど、受け身からの脱却をしなければならぬというお話がありました。だからこそ、高校において受け身なことではなく、主体的に取り組み、内容の具体的な仕掛けを構築していく必要を感じました。そして、白井先生が主体的に学習に取り組む態度の評価の中で、粘り強く学習に取り組む態度に加え、自らの学習を調整しようとする態度、改善する力も必要になってくるとおっしゃられて、まさにそのとおりだと改めて実感したところです。改善する力というのは、指示待ちではできないもので、どのように主体的に考えるかで改善する力も生まれてくるわけです。その部分を再度、認識した上で、高校での教育に活かせたらと思います。以上です。

大西 先ほど割愛した部分なのですが、高大接続システム会議の最終報告は、私はかなり気に入って入っていました。試験も2種類行うことが書いてありまして、AO入試を受ける層にも簡単な試験を課そうということが書いてあり、学力を担保することもうたわれておりました。ところが、その試験が「学びの基礎診断」となって、世間的にもあまり注目されなくなってしまい、「共通テスト」ばかりが話題に上ったのは、個人的には残念です。大学生がどのような力を持っているべきかの議論を、もう1回、確認しなければいけないのではないかと思います。

それから、今後、調査書が変わり、e-Portfolioというものになります。理念は分かるのですが、今のところ大学でそれをきっちり受けとめる力は残念ながらありません。1,000通の調査書をいただいたとして、それをきっちり読んで評価に活かす自信は、正直ないと思います。高校の先生方に無理をお願いしているのに、本当に申し訳ないという気持ちを持っております。私自身も、以前、調査書を書いておりました。国立大学の推薦書を書いて落とされたときには、とても怒っていましたので、気持ちはよく分かり、本当に申し訳ないと思っております。

鮫島 調査書のお話が出たので、森口先生から調査書に関して何か伺いたいことがあれば、少しお願いできればと思います。高校の先生方が、一番聞きたいところかと思います。

森口 調査書を書いている側から言いますと、前向きに取り組んでいることを具体的な内容として書いたほうがいいのでしょうか。調査書の記入欄には抽象的な言葉を用いて「さまざまなことについて積極的に取り組む」などと漠然とした記述になってしまっていますが、このようなケースは非常に多いと思います。ただ、漠然とした内容では伝わらないということは、私たち

は調査書を書きながら実感しています。けれども、抽象的な一つ一つの言葉であっても、その生徒に対して「こんなことを頑張っていた」などと思い出しながら記入しています。しかし、それでは具体的な事実を入れ込むことができませんし、すべて記入して豆粒みたいな字になると調査書は読んでもらえない状況になると思いますので、端的に書いてしまいます。大学側として欲しい情報は、具体的にどのような内容なのかをお伺いできると大変ありがたいと思います。



西郡 なかなか難しい質問です。どのような形が評価できるのかは、先生方が書く部分は評価しにくいところがあります。大変非常に熱心に書かれている先生の調査書は読み応えがあるのですが、大学関係者で調査書を何百枚、何千枚と見る経験のある方は分かるかと思いますが、文言がほとんど一緒というものがあります。1年生のときに「よくできた」、2年生のときに「とてもよくできた」、3年生で「さらによくできた」というように、言葉の程度が変わっていただけという調査書もかなりあります。調査書の内容を先生方が書いているところを評価しようとなると、先ほども言いましたように、志願者本人以外が書いたもので点数を付けてしまうことによる問題があるのかと思います。

そのほかにも、「調査書」で言いますと、以前、志願者本人が申請する活動実績報告書と調査書の内容を比べてみました。ある高校は生徒

が出している検定や資格という活動実績と調査書で書かれている内容が完全に一致しています。つまり、高校で生徒から聞いて作成していると思われる調査書がある一方で、生徒の活動実績の内容と調査書で書かれているものが全く一致していないものもありました。そうすると、これらの情報を見て評価するのは難しいと思われる。

さらに評定平均の評価という話もありますが、評定平均についても、九州地区の佐賀大学を受ける高校がメインですが、A B C Dという評定区分について、Aに該当する人が何割いるかということ調べてみました。高校の所在地や入学難易度に分けて整理をしたのですが、それぞれの高校で考え方がとても違います。A段階評価を多く出しているところもあれば、かなり厳しく付けているところもあります。そのような意味では、評定平均だけを使うこともできません。

調査書を入試に使用する試みは、大正時代の旧制高校のときからありました。そんなに簡単に解決できる問題ではありません。ご存じの方もいるかもしれませんが「四六答申」という、昭和46年の答申で共通一次テストが議論された際に、調査書を使いたいという動きがあり、それを共通一次の試験で修正しようという議論もありましたが、それは別の問題が生じるといことで、そのような話はなくなったと報告されています。ですので、調査書を熱心に書いている先生方にとっては「何で、これを評価してくれないんだ」と思われる方もいるのは重々理解できますが、調査書を直接的に採点するのは結構難しいのです。だからこそ、筑波大学のように、チェック項目みたいなものを作って、調査書評価を工夫される動きが生まれているのではないかと思います。

鮫島 ありがとうございます。まだまだ聞きたいことがあると思いますが、私たちの思いと

しては、このような場をつくらせていただけたことが非常にありがたかったと考えております。フロアからのご意見やご質問を直接受ける場にはならなかったかもしれませんが、皆さん、それぞれ、今回の取り組みを伺って、ぜひ、またご自分の現場でどのようにしていったらいいのかという実践知を検討していただけたらと思います。せっかくですので、このような場で出会った大学教員に「どうなっているんですか」「どのようにされているんですか」と尋ねてみてはいかがでしょうか。それが1つの正解ではないと思いますが、それぞれの大学が、いろいろ頭を悩ませながら行っています。「入試」そのものを維持できているのかということもありますが、現場の問題点や課題を踏まえながらも、やりたいことは、「教育」だと思えます。きちんと学力の3要素を付けさせたいという思いを共有している協働者として、今後もこのような対話の場をつくっていかれたらと思いますので、このような取り組みがございましたら、ご参加いただいて、一緒に議論の場をつくっていただければと思います。

改めまして、パネルディスカッションの先生方に、もう一度、拍手をよろしくお願ひいたします。

森口 安紀（京都市立塔南高等学校教頭）

スライド1

第17回高大連携教育フォーラム
高校におけるキャリア形成




令和元年12月7日（土）
京都市立塔南高等学校

スライド2

本日の説明内容

1. 塔南高校の紹介
2. 総合的な探究の時間
3. まとめ



スライド3

Kyoto Municipal
Tonan High school


1. 塔南高校の紹介



スライド4

塔南高校の概要

学校名：京都市立塔南高等学校
 由来：東寺の五重の塔の南にあることから
 所在地：京都市南区吉祥院観音堂町41番地
 創立：昭和38年
 学科：教育みらい科（定員40名）
 ■平成19年度から設置
 普通科（定員200名）
 ■特別進学コース
 ■普通進学コース



スライド5

教育目標

- 高い学力と豊かな人間性を育む
- 将来、社会で活躍・貢献する人材を育成する

『なりたい自分』を探し、深める

スライド6


『なりたい自分』を探し、深める

なりたい自分になるための
自分探しと自分づくり

キャリア教育を通じて
 社会で活躍・貢献できる人材
 を育成するための取組

新普通科系高校に向けて

元洛陽工業高校唐橋校地への移転に向けて、塔南高校の教育風土を引き継ぎつつ、「新しい学校づくり」を推進しています！




新普通科系高校 新校舎のイメージ図

現在の中学2年生から新普通科系高校の校舎での学びが始まります！



新普通科系高校への接続
塔南高校の教育改革

- 1) コミュニティスクール
「社会での学び」を支えるサポート機能
地域・企業・行政・大学等との連携
開かれた学校へ（授業公開・学校評価の充実）
- 2) キャリア教育
将来を前向きに考えるマインド
興味・関心から探究し社会への提案へ
「なりたい自分」を目指して進路希望を実現
- 3) 主体性の育成
生徒の学校運営協議会への参画
学校・地域でのボランティア活動
国際交流・サイエンスイベントへの参加



新普通科系高校への接続
1) コミュニティスクール

■ 京都府内の高等学校で初
地域、企業、行政、大学等と連携しながら、
生徒の豊かな学びを支える

学校での学び（基礎知識）と
社会での学び（リアリティ）をつなぐ

学校運営協議会
生徒会執行部やボランティアリーダーの生徒が参画し、自分たちの取り組みたい活動を提案



新普通科系高校への接続
2) キャリア教育



普通科1年「総合的な探究の時間」（グループワーク）
普通科2年「総合的な探究の時間」（課題探究）
教育みらい科2年「学校現場実習」（小学校）
普通科2年「キャリアについて考える」（企業訪問）

新普通科系高校への接続
3) 主体性の育成



オープンスクールボランティア（生徒企画）
吉祥院図書館での科学あそび（科学部）
グローバルリーダー育成研修参加（セブ島）
防災ボランティアと南消防団の連携（防災ハイスク）

スライド13

Kyoto Municipal Tonan High school 13

2. 総合的な探究の時間

スライド14

3年間のキャリア教育

普通科

進路への関心を高める	進路を探究する	進路を決める
1年次 ・総合的な探究の時間 (NPOとの連携) ・目標設定 ・キャリアアドバイザー(教員) ・大学訪問	2年次 ・課題探究 ・国際交流授業 ・大学・企業・研究機関 (キャリアアドバイザー) ・キャリアアドバイザー(教員)	3年次 ・研究・演習科目 ・進学指導

国際交流 (Global Classmates)	課題探究 (発表の様子)	研究室訪問 (京都工芸繊維大学)

スライド15

総合的な探究の時間

- NPO 法人と共同で教材や指導法を開発
- 自己理解と他者との関わりから自分の将来を描く
- 興味・関心のあるテーマについての個人探究
- 主体的・対話的で深い学び

1年 グループでの協働 (ペーパータワー)	2年 個人探究のグループでの発表

スライド16

1年次 進路への関心を高める

1 学 期	個性を知る【自分と他者】、将来を考える			
	<table border="1"> <tr> <td>価値観</td> <td>興味</td> <td>欲求</td> <td>特性</td> </tr> </table> <p>大切にしたい価値観・未来世界の想像・興味のある仕事</p>	価値観	興味	欲求
価値観	興味	欲求	特性	
2 ・ 3 学 期	能力を高める (コミュニケーション力・問題解決力)			
	<table border="1"> <tr> <td>聴く力</td> <td>考える力</td> <td>伝える力</td> </tr> </table> <p>傾聴と質問力・伝わる伝え方 クリティカルシンキング・マーケティング</p>	聴く力	考える力	伝える力
聴く力	考える力	伝える力		

スライド17

グループワークの様子

--	--

- ・机・椅子を自由にレイアウトして学習活動を展開
- ・高速インターネット回線とWiFi環境を導入し、タブレット端末 (iPad) を新たに整備 (アクティブ・ラーニング教室にて)

スライド18

1年次 マーケティング 「ニーズを満たす商品の提案」

スライド 19

1 年次 「総合的な探究の時間」 の評価			
達成度			
	3	2	1
協働する力	自己の特性を多角的に知り、他者の多様性を認め、た上で仲間と協働することができ、	自己の特性と他者の多様性を知り、	自己の特性を知り、
探究する力	教育に関する現状と課題に対して体系的な整理によって考察を深めるとともに、	教育に関する現状と課題に対して考察するとともに、	教育に関する現状と課題を知るとともに、
表現する力	そのプロセスと成果を文章やプレゼンテーションによって的確に表現することができた。	そのプロセスと成果を文章やプレゼンテーションによって表現することができた。	そのプロセスと成果を自分なりに表現することができた。

スライド 20

2・3 年次 進路を探究・決定する

探究活動・キャリアフィールドワーク

自己理解
探究課題設定
調査研究
発表会

これからの時代に必要な力を考える
 個人の興味関心に応じた課題設定
 研究計画書・進行管理・企業大学訪問・論文作成

ライフキャリアパス

キャリアイメージ
自己アピール
ディスカッション


自己の将来像を言語化・発表

スライド 21

2 年次 企業・大学・地域連携 キャリアフィールドワーク

■ 将来、社会にどのように貢献するかを学ぶ

学問と社会とのつながりを知る（研究機関との連携）
 企業理念や働く上での思いを知る（企業等との連携）



- ・村田機械株式会社
- ・山田木工所
- ・京都市芸繊維大学
- ・京都市国際交流会館
- ・南区消防署・消防団 など

スライド 22

2 年 課題 研究 発表 (例)

■ 翻訳できない言葉

* マレー語

PISANZAPRA (ピサンザプラ)

バナナを食べるときの所要時間

- ・美味しいバナナが育てられている
- ・日本語の単語にはおきかえられない

その言葉の意味を理解する

➔

異文化を受け入れる

スライド 23

2 年次 「総合的な探究の時間」 の評価			
達成度			
	3	2	1
探究する力① (課題設定能力)	自己の将来を見据えた社会に関する課題を設定し、	自己の関心に応じた社会に関する課題を設定し、	自己の関心に応じた課題を設定し、
探究する力② (課題解決能力)	調査・研究の内容を体系的に整理することによって考察を深めるとともに、	十分な調査・研究から考察するとともに、	それに対して考察するとともに、
創造する力	根拠に基づいた解決策と社会に役立つ新たな価値を提案し、	根拠に基づいた解決策を提案し、	自分なりの解決策を提案し、
表現する力	文章やプレゼンテーションによって的確に表現することができた。	文章やプレゼンテーションによって表現することができた。	文章やプレゼンテーションによって表現しようとした。

スライド 24

3 年次 「総合的な探究の時間」 の評価			
達成度			
	3	2	1
協働する力	自己の特性や強みについて多角的に理解し、	自己の特性や強みについて理解し、	自己の特性や強みについて考え、
創造する力	体系的な進路研究を通してキャリアイメージを持ち、	進路研究を通してキャリアイメージを持ち、	進路研究を通してキャリアについて検討し、
表現する力	将来設計について明快に表現することができた。	将来設計について表現することができた。	将来設計について表現しようとした。
表現する力	文章やプレゼンテーションによって的確に表現することができた。	文章やプレゼンテーションによって表現することができた。	文章やプレゼンテーションによって表現しようとした。

スライド 25

Kyoto Municipal Tonan High school 25

3. まとめ

スライド 26

生徒のキャリア意識の向上

1年次	進路への関心を高める 個性を知る 将来を具体的に考える	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解 興味のある仕事 傾聴・質問力・伝える伝え方 クリティカルシンキング マーケティング
2年次	進路を探究する 課題探究 キャリアフィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> これからの時代に必要な力 個人の興味関心に応じた課題設定 研究計画書 進行管理 企業大学訪問 論文作成
3年次	進路を決定する 自己の将来像を言語化	<ul style="list-style-type: none"> キャリアイメージ 自己アピール

スライド 27

1年次 生徒のキャリア意識の向上

1年次

高校入学 言語に興味関心

自分の将来について、まだ、あまり考えていない

自己理解：自分の適性
他者理解：協働する力

興味関心・学びたいこと

将来の職業等への漠然とした思い

「英語を活かした職業に就きたい」という漠然とした思い

スライド 28

2年次 生徒のキャリア意識の向上

2年次

高校入学 言語に興味関心

自分の興味関心を探究する

課題設定・調査研究・発表会

学びたいことを具体化

学問と社会とのつながりを知る
企業理念や働く上での思いを知る
社会を取り巻く様々な課題を知る

主体的な活動

自己の将来像と結びつける

「英語を活かした職業に就きたい」という漠然とした思い

「翻訳できない言葉」を探究し、学びたいことを具体化

社会との関わりを考える
国際交流会館で
キャリアフィールドワーク
留学生のために自分ができることは何か
自己の将来像と結びつける

留学

スライド 29

3年次 生徒のキャリア意識の向上

3年次

高校入学 言語に興味関心

1年次 自分の適性や興味関心を学びたいこと・就きたい職業へ

2年次 漠然とした思いを具体化し自己の将来像と結びつける

3年次 自己の将来像を言語化

大学進学 進路決定

「英語を活かした職業に就きたい」という漠然とした思い

「翻訳できない言葉」を探究し、学びたいことを具体化

社会との関わりを考える
国際交流会館で
キャリアフィールドワーク
留学生のために自分ができることは何か
自己の将来像と結びつける

留学

大学進学 進路決定

スライド 30

生徒のキャリア意識の向上

1年次	進路への関心を高める 個性を知る 将来を具体的に考える	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解 興味のある仕事 傾聴・質問力・伝える伝え方 クリティカルシンキング マーケティング
2年次	進路を探究する 課題探究 キャリアフィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> これからの時代に必要な力 個人の興味関心に応じた課題設定 研究計画書 進行管理 企業大学訪問 論文作成
3年次	進路を決定する 自己の将来像を言語化	<ul style="list-style-type: none"> キャリアイメージ 自己アピール

スライド1



スライド2

自己紹介

- 大西俊弘
- 公立高校(3校) 19年
- 国立中高一貫校 7年
- 龍谷大学理工学部 13年目
- 主として教職課程を担当
- 他大学の非常勤講師

スライド3

本日のお話

- PISAショック
- 文部科学省の教育政策
- 高大接続システム改革会議「最終報告」
- 龍谷大学入試の現状
- 私立大規模大学の入試を変えられるか
- 令和7(2025)年入試に向けて

スライド4

近代型学力観

- 工場で働く労働者が必要 → 学校の誕生
- 知識の量、知的操作の速度、正確性
- 共通の尺度で測定可能＝テスト学力
- 協調性、同調性、順応性
- 日本の学校教育はまだこのレベルに留まっている

スライド5

ポスト近代型学力観

- これからの時代(未来)を生きていく子供に必要な力は何か？
- 未知の課題に対処する能力
- 意欲や創造性・能動性を重視
- 対人コミュニケーション能力
- ネットワーク形成力、交渉力
- (近年はAIの出現)

スライド6

PISA2018の新聞報道

PISAにおける日本の順位の変移

年	科学的リテラシー	数学的リテラシー	読解力
2000	1	8	15
2003	2	14	14
2006	6	10	10
2009	5	9	8
2012	4	7	8
2015	5	8	10
2018	5	8	15

2019年12月3日
新聞報道

※18年は79カ国・地域が参加

スライド7

PISAショック

- 2004年12月7日 PISA 2003の結果発表
- 2004年12月14日 TIMSS 2003の結果発表
- 「読解力」が14位
- 「学力低下」をマスコミは大きく報道
- 文部科学省の政策に大きな影響
- 「言語活動の充実」 → 現行学習指導要領

スライド8

PISAの読解力(Reading Literacy)

- 実社会で直面する実際的な課題が対象
- 文章6割、実用的な図表・地図4割
- 理科や社会科に関連する幅広い話題
- 自由記述形式4割
- 本文の内容に対する「評価・批判」を要求
- 課題文に書かれたことを根拠とする意見

鈴木誠「教育先進国フィンランドから何を学ぶか」より引用

スライド9

全国学力・学習状況調査

「試験」で現場の意識を変えよう!

- 文部科学省による全国学力テスト
- 初期は悉皆調査 → 抽出調査(抽出率約30%)
- 小学校6年(約30万人)、中学校3年(約40万人)
- A問題・・・基礎知識を問う問題
- B問題・・・基礎知識を活用して考える問題
- B問題はPISA型読解力を意識、グラフや図表が多い

スライド10

A問題

- 従来型のテスト
- 平成24年度の問題例

スライド11

国語Bの問題例 (平成24年度中学3年)

スライド12

数学Bの問題 (平成24年度中学3年)

スライド 13

「試験」で現場の意識を変える政策

- PISA型の読解力重視
- 小・中学校にはある程度浸透
- 次は高等学校 → 共通テスト

スライド 14

H30試行テスト(国語)

The screenshot shows a digital interface for a Japanese language test. On the left, there is a reading passage with several paragraphs of text. On the right, there is a section titled '著作者のイロハ' (Author's Profile) which includes a table with columns for '著作者名' (Author Name), '性別' (Gender), '生年' (Year of Birth), '死年' (Year of Death), '国籍' (Nationality), and '所属' (Affiliation). Below the table, there is a section for '著作者の海外在住' (Author's Overseas Residence) with a table for '海外居住国' (Overseas Residence Country), '居住期間' (Residence Period), and '理由' (Reason).

スライド 15

H30試行テスト(数学 I・数学 A)

The screenshot shows a digital interface for a mathematics test. It features a math problem involving a circle and a chord. The problem asks for the length of a chord given the radius and the distance from the center to the chord. A diagram shows a circle with center O, radius r, and a chord AB. The distance from O to the midpoint of AB is given as d. The problem asks for the length of AB. The interface also includes a section for '問題の解説' (Problem Explanation) and a '解答' (Answer) section.

スライド 16

共通テスト

- 「PISA型の読解力重視」だけにしとけば・・・
- 高校の授業を変えたい
- 英語の4技能重視 → 民間テストの活用
- 国語・数学で記述式導入
- 新学習指導要領で学んだ学年から仕切り直し?
- 令和7(2025)年入試

スライド 17

高大接続システム改革会議「最終報告」

- 平成 28 年 3 月
- 「高等学校教育改革」
- 「大学教育改革」
- 「大学入学者選抜改革」

スライド 18

学力の3要素

- 「知識・技能」
- 「思考力・判断力・表現力」
- 「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」
- 大学教育を受けるために必要な「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」も適切に評価

スライド19

総合型選抜（現行、AO入試）

- 調査書等だけでなく、各大学が実施する評価方法（※）又は「大学入学共通テスト」を必須化
※小論文等、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目テスト、資格・検定試験の成績
- 出願： 9月以降（現行：8月）
- 合格発表： 11月以降
- 募集人員： 制限を設けない

スライド20

学校推薦型選抜（現行、推薦入試）

- 調査書等だけでなく、各大学が実施する評価方法（※）又は「大学入学共通テスト」を必須化
※小論文等、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目テスト、資格・検定試験の成績
- 学校長からの推薦書の中で、本人の学習歴や活動歴を踏まえた学力の3要素に関する評価を記載すること、及び大学が選抜で活用することを必須化
- 出願： 11月以降（現行と同じ）
- 合格発表： 12月以降
- 募集人員： 入学定員の5割を超えない範囲

スライド21

調査書の様式変更

- 「指導上参考となる諸事項」の欄を拡充
 - ①各教科・科目及び総合的な学習の時間の学習における特徴等
 - ②行動の特徴、特技等
 - ③部活動、ボランティア活動、留学・海外経験等
 - ④取得資格・検定等
 - ⑤表彰・顕彰等の記録
 - ⑥その他
- 「評定平均値」 → 「学習成績の状況」

スライド22

2種類の試験を提言

- 高等学校基礎学力テスト(仮称)→ 学びの基礎診断
- 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)→ 共通テスト

スライド23

午前中の講演を受けて

- 文部科学省の施策や審議会答申
- 国立大学が主たるターゲットなのでは？
- 大学生の大半は私立大学生
- 大都市圏の私立文系がボリュームゾーン
- それに向けた提言・提案がないのでは？
- 少子化 → Fランク大学

スライド24

龍谷大学

- 深草キャンパス(京都市伏見区)
- 大宮キャンパス(京都市下京区)
- 瀬田キャンパス(滋賀県大津市)
- 入学定員 約5千人
- 学生数 約2万人
- 専任教員数 約540名
- 関西の大規模私大の1つ
- 歴史は古い、中堅レベル

スライド 25

学部・大学院

<ul style="list-style-type: none"> □ 文学部 □ 経済学部 □ 経営学部 □ 法学部 □ 理工学部 □ 社会学部 □ 国際学部 □ 政策学部 □ 農学部 □ 短期大学部 	<ul style="list-style-type: none"> □ 文学研究科 □ 法学研究科 □ 経済学研究科 □ 経営学研究科 □ 社会学研究科 □ 理工学研究科 □ 実践真宗学研究科 □ 政策学研究科 □ 農学研究科 □ 国際学研究科
--	---

スライド 26

3つのポリシー(AP・CP・DP)

- **アドミッション・ポリシー(AP)** 入学者受け入れの方針
- **カリキュラム・ポリシー(CP)** 教育課程編成・実施の方針
- **ディプロマ・ポリシー(DP)** 卒業認定・学位授与の方針

龍谷大学 入学者受け入れの方針 (アドミッション・ポリシー)

龍谷大学は、建学の精神に基づき「育実を求め、育実を生き、育実を固かにする」ことのできる人間を育成することを「教育理念・目的」として掲げています。この教育理念・目的に基づき、次の入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)を掲げています。

龍谷大学の入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)は、価値観が多様化する社会において、本学の建学の精神を体現するための意識と各学部での教育に必要な適性を有した学生を、幅広く受け入れることを基本とします。

各学部は、龍谷大学の入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)のもと、各学部それぞれの卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針に基づき、各学部の入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)を定めるとともに、各入学試験を設定しています。

■各学部の入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)

○文学部
文学部では、建学の精神に基づいて、人文学の知的体系的探究、教育を通じ、現代社会の複雑な変化や課題に関与し、自らを見失うことなく積極的・主体的に対応しつつ、社会に貢献できる教養及び専門性を備えた人の育成を目標としています。

そのため、次のような人が入学することを求めています。

- 1) 龙谷大学の教育理念や目標を十分に理解している人
- 2) 明確な目的意識と学業意欲を持った人
- 3) 入学試験で必要とされる学力を有している人

スライド 27

入試方式(入試ガイドから)

入試種別	募集要項	試験科目	試験形式	試験日程
公募推薦入試	募集要項	2科目(2科目)	面接・書類審査	2月10日(日)
	募集要項	2科目(2科目)	面接・書類審査	2月10日(日)
	募集要項	2科目(2科目)	面接・書類審査	2月10日(日)
一般入試	募集要項	2科目(2科目)	筆記	2月10日(日)
	募集要項	2科目(2科目)	筆記	2月10日(日)
	募集要項	2科目(2科目)	筆記	2月10日(日)
センター試験利用入試	募集要項	センター試験	筆記	1月17日(日)
	募集要項	センター試験	筆記	1月17日(日)
	募集要項	センター試験	筆記	1月17日(日)

スライド 28

ざっくり言うと

- 公募推薦入試 2日
- 一般入試(A日程) 3日
- 一般入試(B日程) 2日
- 一般入試(C日程) 1日

- 合計8セットの入試問題が必要
- 大半はマークシート方式
- 数学だけは文系・理系ともに全問記述式

スライド 29

3つの入試の募集人員

<ul style="list-style-type: none"> □ 一般入試 □ センター利用入試 □ 公募推薦入試 □ 合計 □ 入学定員合計 	<p>2151名</p> <p>607名</p> <p>905名</p> <p>3663名</p> <p>5154名</p>
--	---

スライド 30

各種入試

- スポーツ活動選抜入学試験
- 文化・芸術・社会活動選抜入学試験
- 伝道者推薦入学試験
- 帰国生徒特別入学試験
- 中国引揚者等子女特別入学試験
- 社会人推薦入学試験
- 指定校推薦入学試験
- 付属校推薦入学試験
- 関係校推薦入学試験
- 教育連携校推薦入学試験
- 外国人留学生入学試験

スライド 31

ざっくり言うと

- スポーツ・文化活動推薦
- 付属校・関係校推薦
- 指定校推薦
- 公募推薦
- 一般入試(A日程)
- 一般入試(B日程)
- 一般入試(C日程)
- センター試験利用
- 入学定員の厳格化

いわゆる「先願」
学生確保には重要
「学力」の担保は不十分

いわゆる「併願」
受験料収入には重要
上位層は……
合否判定は神業の領域
アドミッションポリシー……

補助金の削減
学部等の設置認可に影響

スライド 32

入試を変えられるか？

- 既に体制・システムが出来上がっている
- 組織が大きく意思決定が迅速にできない
- 理系なら「数学と物理ができればよい」という教員の意識
- 他大学と異なる入試方式はとりにくい
- 受験者数が多い
- 入試の回数が多い
- スタッフの数が少ない
- 高校の指導が混乱しないか？

関関同立

産甲龍近

スライド 33

教育課程の見直し

- 平成 28 年 12 月 中央教育審議会
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
- 平成 29 年 3 月
小学校・中学校学習指導要領告示
- 平成 30 年 3 月
高等学校学習指導要領告示

スライド 34

改訂までの流れ

年度	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
中央教育審議会									
教育課程改訂									
教科書採択									
学習指導要領									

高校現場の流れ

教科書

中央教育審議会

教育課程改訂

学習指導要領

スライド 35

新課程のスケジュール

- 平成30年3月 高等学校学習指導要領 告示
- 令和2年度内 各高等学校で教育課程決定
- 令和3年度前半 各高等学校で教科書採択
- 令和4年4月 「学年進行」で新課程実施
- 令和5年度前半 各大学が受験科目発表
- 令和7年2月～ 各大学が入学試験(一般入試)を実施

スライド 36

今後の予想

- 高校が教育課程を決定する令和2年度の時点
- その時点で大学入試科目の情報はほとんどなし
- 高校は安全策をとるしかない
- 大半の大学が受験できるような教育課程を編成
- 具体的には難しい方の科目を配置
- どの普通科高校でも同じような教育課程

指導要録の改訂

- 高等学校にも観点別評価を導入
- 「評定」 → 「学習成績の状況」 名称変更
- 現行の「評定平均値」重視は変わらない？

最後に

- 新学習指導要領での令和7(2025)年入試
- それに向けてどう制度設計をしていくか
- 高校と大学が力を合わせて考える必要あり
- 令和2(2020)年がポイント